

問一

「能力」が個人の所有する直接知覚しえない潜在的な可能性であるのに対し、「できる」ことは特定の社会的状況や環境における可視化された行為に結びついているということ。(八〇字)

問二

機会の平等と市場での等価交換を前提に、成果の代わりに能力によって対価の格差を説明する能力主義は、現実の富の配分の不均等を公正な結果のように見せかけるということ。(八〇字)

問三

贈与を行った者に対して贈与を受けた者が負債の感覚に駆られて返礼を強いられる関係における、互いに等価なものを交換しており、それが関係の公正さを保証するという感覚。(八〇字)

問四

均質で合理的な個人と等価交換を前提とする数学的な市場のモデルは、公正な社会ではすべてが均衡状態にあるという人々の先入観に裏付けられ、現実の不平等をも正当化する洗練された説明原理として、人々の現実感覚と倫理を不断に再生産し続けており、市場交換の背後で働いている異なる諸原理に基づく共同性のあり方を見失わせているということ。(一六〇字)

問五

- (a) 系譜
- (b) 劣
- (c) 保証
- (d) 完遂
- (e) 貨幣

問二

問一

- ① もしかしたら戦乱の世の中が収まって、私たちが再会することもきつとあるだろうが
- ② 女は以前とは似るはずもない恵まれた有様であるが
- ③ 女の平常心ではない様子を親王が見て気付いて
- ④ 親王は女の身なりをきらびやかで盛大な様子にして送り出して

問二

夫が、戦乱の終息後も妻に会えず、妻が再会の約束を忘れて誰かと再婚したかもしれないことに対して感じた。  
(五〇字)

問三

寵愛した女が昔の夫を忘れずにいる愛情に感動して、昔の夫のもとに返してやった親王の恩情は、女の一途さよりも比類ないものだ。(六〇字)

問四

- a ぬ      b ぬ      c ぬ  
に

問五

口

問三

a たまたま      b いくばくも      c のみ (と)

問二

いまだしっしょうせざるものあらず。

問三

(一) 酒を酌み交わして互いに祝おう。  
(二) 故郷までの道のりがわずかでうれしいから。  
(二〇〇字)

問四

使用人が、故郷まで四十里しか進んでおらず、残りの道のりが五千九百六十里もあるのに、あと少しで故郷に帰れると平然と言っているのがおかしかったから。

問五

故郷に少しでも近づくと喜ぶ使用人の言葉には、楽府の歌に通じる旅人の望郷の念が表れているということ。(四九字)